

驚くべき祭文世界と 神霊を駆使する術者たち

四国・高知の山奥に、
すでに絶えてしまったと
思われていた
陰陽道の世界が脈々と息づき、
その術法を伝える者たちが
現存していた——。
それが「いざなぎ流」であり、
太夫^{たゆう}と呼ばれる宗教者である。
長年にわたり
現地での
フィールドワークを重ね、
その奥義を知る
神話・伝承学者の斎藤英喜氏
（佛教大学教授）に
ロングインタビューを行い、
多様な神々とその伝承、
驚きの祭祀、
そして禁断の呪法にいたる
いざなぎ流呪術世界の
奥の奥へとご案内いただいた。

陰陽道 「いざなぎ流」 呪術祭祀の神秘



壺 歴史の闇からあらわれた「いざなぎ流」

いざなぎ流最後の伝説的太夫との出会い

香美市物部は、高知空港近くで河口に至る物部川沿いの国道195号を、上流目指して北東に進んだ先にある。



↑旧物部村（現・高知県香美市物部）の景観。急峻な谷を見下ろす山の斜面に、集落が形成されている（写真＝斎藤英喜／以下★も）。

かつての物部村の中心地・大槌は、上葦生川との合流地点にあり、そこからさらに物部川をさかのぼる流域が「いざなぎ流」の信仰圏といわれる。深いV字谷を形成する地形、そこにへばりつくように点在する家々――。

いわゆる限界集落である物部川上流域の最奥地区に、最後の伝説的太夫・中尾計佐清太夫の住まいがあった。

斎藤英喜氏は、1987年以来、十数回にわたり、今は鬼籍に入られた中尾太夫のもとを訪ね、いざなぎ流祭祀の現場――地域の氏神や地神、旧家の屋敷神の祭りごとや神楽、山や川の鎮め祈禱、霊的な病に対する病人祈禱など――に立ち会い、膨大な時間を費やして聞き取り調査と手紙のやりとりを行った。

そして、研究者としては異例な形でその奥義を授かったただひとりの学者となった。『僕の専門は古



↑斎藤英喜氏（佛教学部歴史学教授）。専門は宗教文化論・神話伝承学で、著書に『陰陽師たちの日本史』（角川選書）、『異貌の古事記』（青土社）、『アマテラス 最高神の知られざる秘史』（学研新書）などがある。2019年末刊行の増補版『いざなぎ流 祭文と儀礼』（法蔵館文庫）は、本稿の参考文献（文中★印）で、陰陽道・民俗信仰研究をアップデートする決定的論考。興味を持たれた人はぜひ一読されたい。



代文学なのですが、『古事記』や『日本書紀』などの文字に書かれた神話世界がある一方で、文字以前の神話があります。当時、それが沖繩に行けばあるといわれていたのだけど、沖繩の口承文化は女性を中心で、男性の研究者はなかなか入り込めなかった。ところが、高知の「いざなぎ流」では、古代のものではないものの、神の由来やお祭りの起源が語られる豊富な『祭文』が残されている。太夫という専門の宗教者もいて、実際にお祭りの現場で誦まれているという。これは見てみたい」（斎藤氏）

に恵まれ、斎藤氏ははじめて現地に赴いた。そこで紹介された中尾太夫は、「自由に見てもいいし、写真を撮ってもいい。録音しても構わない」と気さくに応じてくれたという。しかし――、「あとで気づくのですが、それは『見ても何もわからないよ』ということだ

つたんですね」

いざなぎ流太夫は現代に生きる陰陽師か

「いざなぎ流」とは何か。

端的に言えば、高知県香美市物部（旧物部村）に伝わる民間信仰である。それがなぜ注目されたのか。理由のひとつは、かつて日本の各地で展開されていた信仰の多くがすでに失われ、文書の中にのみとまっていたいるなか、「いざなぎ流」は、古くからの祭祀・祈禱が独立した信仰の体系としてそっくり保持されていたからである。しかしそれだけではなかった。最初研究者が入ったときは、いざなぎ流は修験道一派だと思われてい

たようです。ところが見ていくと、どうも違うらしい。すると今度は、式王子という存在がクローズアップされて、だったらこれは陰陽道なんじゃないかとなったのです」（斎藤氏）

式王子とは何かについては後述するが、「式」とは、「用いる、使役する」の意で、陰陽師はさまざまな精霊を「式神」として用い、使役して、病気を治したり、呪法を行ったりするといわれてきた。つまり、式王子は式神に通じるとして、その法を駆使するいざなぎ流太夫は、現代に生きる陰陽師として注目を集めたのである。

こうして、1990年代後半にはじまる陰陽ブームと相まって、いざなぎ流にはアカデミズムの枠を越えた関心と好奇の目が注がれるようになった。

しかし、その全体像にアプローチすることは容易なことではなかった。

「いざなぎ流は、ひとつのことが解きほぐせたとかと思うと、即座に



↑2016年に15年ぶりに行われたいざなぎ流の大祭より（写真は「日月祭」）。離散した旧家に祀られていた「御崎様」が合祀されたという祈禱殿で執り行われた（★）。



↑在りし日の中尾計佐清太夫。物部川最上流の地区を拠点とし、「古式いざなぎ流」の膨大な伝承と業を保持する最後の太夫と呼ばれた（★）。

新しい疑問点にぶつかるといふ、まさに「謎」の永久運動のような世界」なのだと言藤氏はいう。

近代日本が 切り捨ててきた 呪術的信仰の宝庫

少し歴史をおさらいしてみよう。

安倍晴明で知られる陰陽師は、もとは奈良の平城京以前にさかのぼる、占術を職掌とする官職に由来する。古代律令制における中務省に属する部署の

ひとつ「陰陽寮」に所属し、天文を観測し、地相を読み、吉日凶日を判じ、ことを職務とした人々である。

そして平安時代に入ると、旧来の天文と陰陽の知識に加え、道教由来の方術・呪術や祓禊の呪法などを駆使する霊的コンサルタントとして天皇や摂関家と結びつき、晴明に代表される伝説的陰陽師も登場した。

鎌倉時代以降、武家が台頭すると、陰陽師は幕府の將軍を抱えの存在となる。とくに足利時代には、安倍晴明の

末裔（のちの土御門家）の地位が引き上げられ、天文・暦の職掌を独占するようになっていく。

もとよりその知識と術法は、天皇・貴族や將軍などの権力者によって独占され、管理される性格のものであったが、実情は必ずしもそうではなかった。

平安時代にはすでに陰陽寮に属さない民間の陰陽師がいて、法師陰陽師などと呼ばれていた。そのシンボルが、晴明伝説に登場するライバル（たいてい悪役として扱われる）蘆屋道満で、生国の播磨（兵庫県）

には、法師

陰陽師らの

拠点もあつ

たといわれ

る。彼らは

おもに治病

のための呪

術祈禱や祓

えに携わつ

たと考えら

れているが

その歴史的

な実態はよ

くわかつて

いない。

こうして

中世（平安



↑太夫がかぶる花笠の裏には、陰陽道由来の魔除け印として知られる晴明紋（セーマン）と九字紋（ドーマン）が記されていた（撮影＝横田公人）。
↓家の神・御崎様の祭儀にて、メインとなる本神楽のあとに行われる舞神楽より、弓の舞（★）。



博士とは、江戸時代の地誌にも記された横山村（旧物部村）の宗教者集団で、彼らは土御門家から禁じられていた弓祈禱を行い、口寄せや憑き物落としを担っていたという。

それだけではない。彼らが伝えるテキスト（祭文）や祭りごとのディテールには、修験道や密教、吉田神道などの流儀も流れ込んでいるともいわれる。いざなぎ流の来歴を正確にたどるところはやはり無理であろう。つまるところ、それは近代日本が切り捨ててきた在野の信仰（とりわけ呪術的な祈禱）を貪欲に呑み込みながら独自の歩みをつづけた、膨大な知識の体系というほかないのだ。だからこそ、いざなぎ流は「謎」の永久運動」なのである。

式「祭文」に込められた言霊の呪力

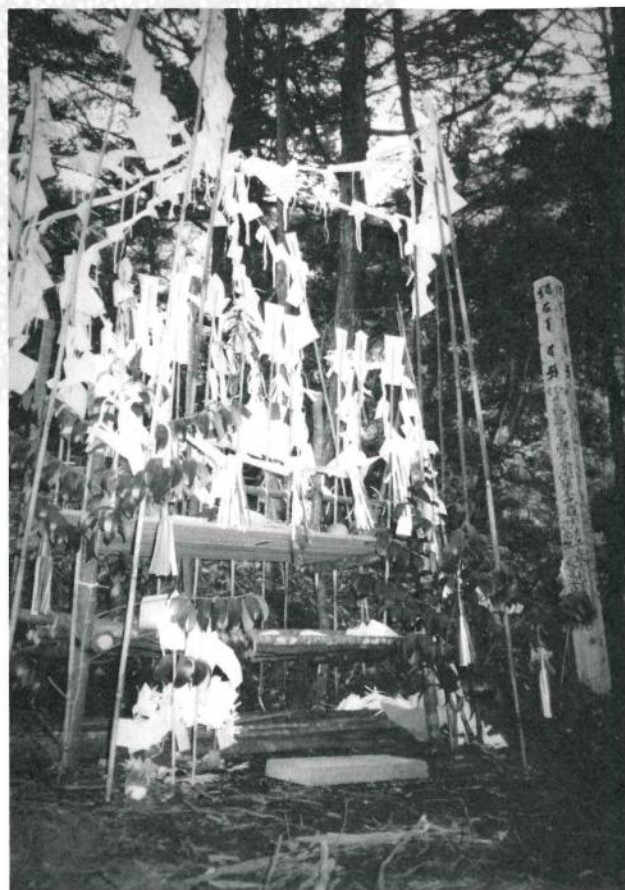
山のもの山へ 川のもの川へ

研究者としては、複数の取材源をもとに客観的なデータを抽出するのが常道のやり方だろう。しかし、斎藤氏はそうしなかった。

「いざなぎ流の深奥へと分け入ること。必要なのは、『太夫』の側に限りなく近付き、彼らの側からのみ見えてくる

世界を記述していくことにある」（「いざなぎ流 祭文と儀礼」より、以下*印も）と考えたからだ。

斎藤氏の「いざなぎ流体験」の最初は、旧物部村別役の小松神社で行われた4日間にわたる臨時祭だった。そのメインは、拝殿内で営まれた氏神への本神楽だったのだが、それと並行して、社殿近くの林の中で、もうひとつ別の祈禱が繰り返られていた。



↑山の神の棚。多数立てかけられた御幣はそれぞれ神の形（神霊の依り代）。中の棚にその供物類が供えられ、棚の下（左の写真）には山の神の眷属らの小御幣が地面に直接立てられている（★）。

「木の枝で二段の棚が組み立てられ、棚の後ろには山の神、大荒神、新木、古木、水神といった神々を祭る御幣がくくりつけられる。中の棚には十二膳の餅、菓子、酒、蜜柑、酒、米粒などが供えられた。さらに棚の下には道六神、四足、すそ、山みさき、川みさき、六道神などの小さな御幣が地面に直接差し込まれ、その前にも供えがされる。この臨時に作られた、地面を含めて三階の棚こそ、山の神の祭壇である」

（*）
まず、山の神に対して、これだけの神霊が祀られることに驚く。御幣は神々の依り代にして、そのお姿をあらわすもので、その多様さはいざなぎ流の特徴でもある。それにしても、棚の下に祀られているモノたちは何なのか。斎藤氏の解説によればこうだ。

「道六神」（道の神、道祖神、道路で事故があると必ず祭られた）
「四足」（山の動物たちの魂）
「すそ」（人の憎しみ、妬みのあらわれ。その魂）
「山みさき・川みさき」（大川、小川が合流しているところに棲息する山川の魔物）
「六道神」（山や川での不慮の事故で死んだ者の魂、無縁仏）
動物霊や魔物たち、死霊、生き霊まで祀らなければならないのは、それらが山の神の眷属であり、災いや病などをもたらす原因となるものだからだ。

「だから、まずは場を清めなければならぬ。人間の行いによって生じた見えない世界の混乱状態をいったん整理して、山のもの山へ返し、川のは川に返し、『すそ』があつたら鎮める」——それがいざなぎ流の基本だと斎藤氏はいう。この祭儀は「取り分け」と呼ばれ、いざなぎ流のあらゆる祭儀の最初に行われる儀礼である。

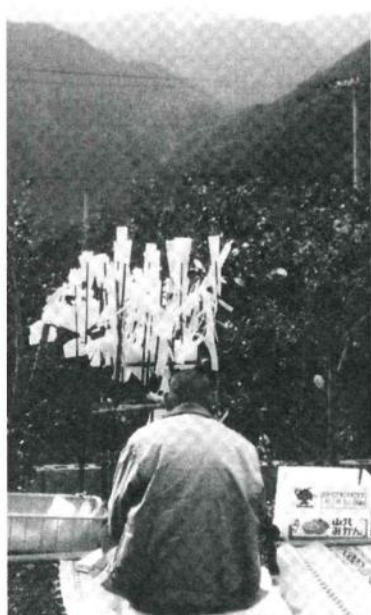


↑山中の「すそ林」にて、「すそ」を鎮める太夫。鎮めの印を結び、ケガレを移した御幣を鎮めていく(★)。

↓「ミテグラ」(写真右)。ワラでできた輪形の台に「だいば人形の幣」ほか4本の幣を立てたもので、取り分け儀礼に欠かせない祭壇(★)。



この「りかん」は、基本、太夫がその場に即して編み出す言葉とされている。「りかん」をきちんといえるかどうか、その太夫の宗教者としての能力をあらわしているという。



↑山の神の棚を山々に向かって設置し、山の神やその眷属を送却する祈禱を行う太夫。ここでは、新築の家の建物に残る「木霊」が送り返されている(「いざなぎ流 祭文と儀礼」より)。



いざなぎ流の始祖に位置づけられる。ともあれ、右につづく「山の神の祭文」のあらすじを抄訳してみたい。

山の神は虫や鳥獣を自分の眷属とし、その羽休め木を設定した。ところが日本の氏子らはそれとは知らず木を伐採し、病を得た。氏子らはその原因を知るために「天竺星のじよもんみこ殿」なる者を雇い、占ったところ、山の神の本を伐ったお叱りだと判明した。そこで氏子らは「じよもんみこ殿」に山の本々の伐採を許可してもらい「受け約束」の交渉を依頼。山の神は「月々日々」「終夜の」神楽を要求したが、それでは氏子らの生活もままならないとして、「じよもんみこ殿」は交渉を進め、特定の日の神楽奉納を約束して伐採を許してもらった……。

「殿」こそ、異国(天竺)から来訪し、かつ山の神の祭祀を行う太夫自身の始祖・原像であるという。つまり、いざなぎ流太夫は、「星のじよもんみこ殿」に成り代わって祭儀を執行するわけである。そして太夫は、祭りの目的に応じて、祭文には書かれていない効果的な文言(これを「りかん」という)を発し、神々を統御する。たとえば、「山の神の祭文」を取り分け儀礼で誦む場合、こんな「りかん」が語られる。

「御部類、御眷属、山の神、川の神、六面王に八面王、夜行神、山スズレ、川スズレ、しそく狐、狸、サンカの四足二足、魔群化性の者が、御縁を掛けてござろう共、御縁を切らって、御縁を放いて、黄金花べら花ミテグラへ、諸願成就、集まり影向成り給へ」

これは、山の神に「六面王に八面王、夜行神……」といった魔物を引き連れ、取り憑いた縁を切って祭壇のミテグラ(神霊の依り代)に集まるように促すメッセージなのだ。

↑家屋内で行われる祭り。五色の色紙を垂らした綾笠をかぶり、手には長い神楽幣を持ち、白い浄衣をまとった太夫たちは、ゆっくりとしたリズムの太鼓に合わせ、神楽祭文を誦んでいく。

「山」の神の父の御名は、ら天の権ぜの王と申す、母の御名は、まき(横)大権(黄金) 如来の王と申す、之天地久(天竺)もくろが御山へ天や上らせ給ふてござれば、三人のこうきんだち(御公達)がいでき初まり申してござれば、太郎のこうきんだちは、東々方花ぞが山をりよ(領)じ持せ給ふて御わします……(★) カッコ内は斎藤氏が補ったもの。当て字や意味不明なワードも混じっているが、要するに、山の神は「ら天の権

ぜの王」と「横黄金如来の王」との間に生まれた3人兄弟で、その長男である太郎は天竺の山で、「東々方花ぞが山」を領地として与えられた(が、それを不服として、日本を領地とすべく日本に天降りし、山の神になる)という内容だ。

ちなみに、「天竺」とはインドの古名で、「如来」は仏教のホトケの名称。日本神話とも仏教説話とも異なる、中世的といわれる異様な世界観がここに開陳されている。

そもそも、いざなぎ流の「いざなぎ」は、日本神話のイザナギ命とはまったく別の存在である。「天竺いざなぎ様」といって、祭文に天竺に住まう不思議な術の達人として語られており、いわば

「いざなぎ流の『祭文』は何を語っているのか」

「気付けされたのは、いざなぎ流の祭祀・神楽が、太夫たちの口から発せられる多種多様なコトバによって成り立っている事実である」(★) いざなぎ流の最大の特徴は、祭祀儀礼のさまざまな場面で誦まれる祭文にある。端的には神を祀(祭)るときに誦む文のことだが、主要な神々ごとに祭文があり、神々の由来や、どのような

「祭りや祈禱のなかで不明なことがあれば、祭文に書いてあることを確かめてみれば、たいていのことはここに書いてある」(★) それが中尾太夫の教えだったという。では、「山の神の祭文」を例に、その冒頭をのぞいてみよう。

「山の神の父の御名は、ら天の権ぜの王と申す、母の御名は、まき(横)大権(黄金) 如来の王と申す、之天地久(天竺)もくろが御山へ天や上らせ給ふてござれば、三人のこうきんだち(御公達)がいでき初まり申してござれば、太郎のこうきんだちは、東々方花ぞが山をりよ(領)じ持せ給ふて御わします……(★) カッコ内は斎藤氏が補ったもの。当て字や意味不明なワードも混じっているが、要するに、山の神は「ら天の権

「いざなぎ流の『祭文』は何を語っているのか」

「いざなぎ流の『祭文』は何を語っているのか」

図説

一冊で学び直せる 戦国史 の本

これだけ押さえておけば、
戦国時代がよくわかる

- 第1章 戦国時代をつかむ
- 第2章 関東騒乱と応仁の乱
- 第3章 群雄割拠の時代の始まり
- 第4章 瓦解に向かう室町幕府
- 第5章 近畿と西国の猛者たち
- 第6章 東の戦国武将たち
- 第7章 革命児 織田信長の夢
- 第8章 豊臣秀吉の光と影
- 第9章 戦いの時代に幕が下りる



これだけ押さえておけば
戦国時代がよくわかる

複雑な戦乱の時代を豊富な図解で一気につかむ

Gakken

後藤武士 監修

B6判/オールカラー/240ページ

本体720円+税 Gakken

全国の書店、
一部コンビニエンスストアにて
好評発売中!

お近くの書店でお求めください。
書店ご不便の際は、
「ショップ学研+(ショップガッケンプラス)」
<https://gakken-mail.jp/ec/plus/>
または、0120-92-5555 (無料通話)
にてご注文ください。
在庫切れの場合はご容赦ください。

参

死霊の再生と神への祭り上げ

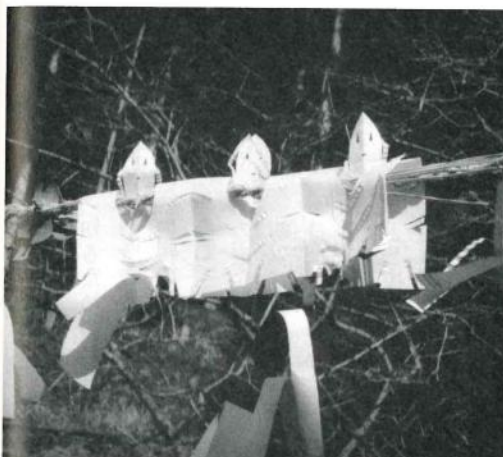
戻す必要がある。いざなぎ流では、それを直接墓場で行う。つまり、墓石の下に

太夫は、手ぬぐいを頭から被って墓に赴く。そして墓石の前で近くの土中に埋まる石を掘りだす。そこに空いた穴から埋葬された霊に呼びかけるためである。墓の前に座った太夫は、「三斎幣」という御幣を墓石に立てかけ、

墓から死霊を「取り上げ」
守護神に祭り上げる

いざなぎ流の祭りは、神社で行われる公の性格のものもあるが、基本は家の祭りであると斎藤氏はいう。「家に祭られている神様で特徴的なのが、『御崎様』。その家における最高位の神で、その神を祀ることは、いざなぎ流の太夫にしかできない。そして、御崎様を祀っている家では、主人が亡くなると『巫神』になる。ここで注目すべきは、故人(家の主人)を巫神という神に祭り上げるための儀式が神楽として行われるということなのです」日本人の一般常識では、家の主人が

亡くなると、一定の期間(33年、49年、あるいは50年)を経ると、先祖神に昇華して家の守り神になると考えられている。あくまで自然の流れでそうなるの流れて信じているのだが、いざなぎ流ではちがうという。以下、斎藤氏の著書を参考に、その様子を追ってみよう。



↑祭りの舞台の四方、シメナワにくくられて設置される「ヒナゴ幣」。舞台に侵入する魔を防御する。

↓墓石の前で行われる「塚起こし」の儀礼。御幣を墓石に立てかけ、印を結び、霊に語りかける(「いざなぎ流 祭文と儀礼」より)。



↑「三五斎幣」に憑いた御霊を大事そうに抱え、墓場から家へと戻ってくる太夫(★)。印を結び、さまざまな神霊に挨拶の唱文を唱えたのち、霊に対する直接の呼びかけを行う。その内容は、墓所に鎮まっている間に縁が生じた地神、地荒神、大土公(以上は土地の神)、十三大師(十三仏のことか)のほか、山の神などのご縁を切って御幣に還るよう促すものである。

再生した御霊を
神へと昇格させる儀式

興味深いのが、縁切りの対象として挙げられる「極楽浄土の浄土の地獄」

という文言である。太夫によれば、「死者は地獄で溺れているので、そこから上げてやる」とのことだが、要は、葬式では極楽浄土へ引導するといいつつ、御霊は地獄の苦界であえいでいるという認識なのだろう。こうして、仏教との縁を切ることが「巫(御子とも)神」となる大前提となるようだ。さらに、踏ん切りのつかない霊に向かつて「花の歌」が歌われる。

「帰ってきた霊は、赤ちゃんに戻ったというんですよ。まさに赤子を取り上げるといふ感覚のようで、太夫は掌に赤ちゃんのお尻の感触を覚えるといいます(斎藤氏)そして、ここから舞台は屋内に移る。すなわち、再生した御霊を神へと昇格させる祭儀の本番「取り上げ神楽」である。だが、その複雑で事細かな儀式に言及する紙幅はないので、興味を持たれた読者はぜひ「いざなぎ流 祭文と儀礼」をご参照されたい。

ざっくりとそのプロセスを述べると、家に招いた御霊(荒人神)は、9つのプロセスを経て「荒人神」へと昇華し、字号という仮の神号が与えられる。そして「取り上げ神楽」の3〜5年後に行われる「迎え神楽」を経て、正式に「巫神」と相なる。

それらの儀式を主導するのは太夫が誦みあげる唱文なのだが、ここで誦まれるのは、とくに「行文」といい、そのひとつに、荒人神が羽黒山や比叡山伊吹山などを巡礼するくだりがある。つまり、神となるために聖なる山々で修行をするというシナリオなのだ。

さらに、聖なる水を浴び(密教でいう灌頂儀礼)、神格を上げていくというくだりもある。このあたりは修験道や密教とも習合したいざなぎ流ならではの特徴がうかがえ、実に興味深い。



↑「三五斎幣」を抱き、家へと戻ってきた太夫は、清めの儀式を受ける。家に迎えられた御霊(荒人神)は家屋内の神楽の舞台へと進む(撮影=横田公人)。

認する。数珠をくり、珠の数が奇数か偶数かで神霊の意向を判別する、いつもの太夫の数珠占いである。こうして、霊が御幣に還ったことを確認したら、御霊を白い浄衣に包み、両手で赤ん坊を抱くようにして太夫は家に戻ってくる。

四「法文」と「式王子」の裏世界へ

表の中に裏あり
裏の中に表はなし

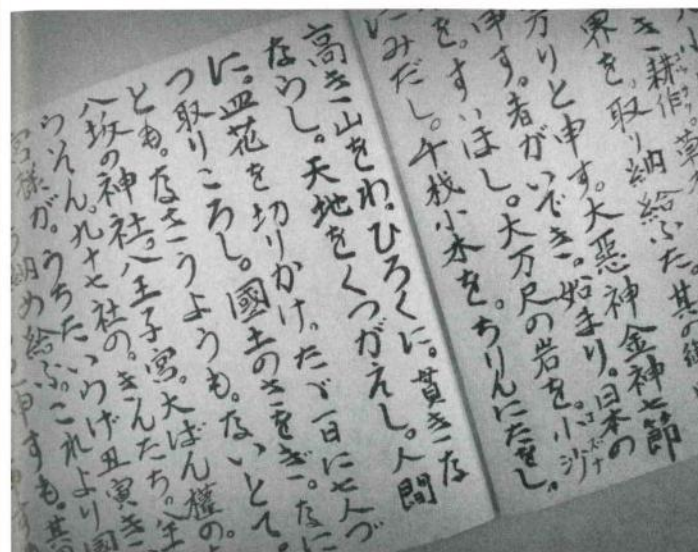
いざなぎ流の特色が多種多様な「祭文」にあるのは既述のとおりだが、一方で、病人祈禱で誦まれ、あるいは「式王子の法」に関わり、呪いや調伏に直結することから秘密とされ、研究

者も容易に近づけなかった謎のテクスト群があった。

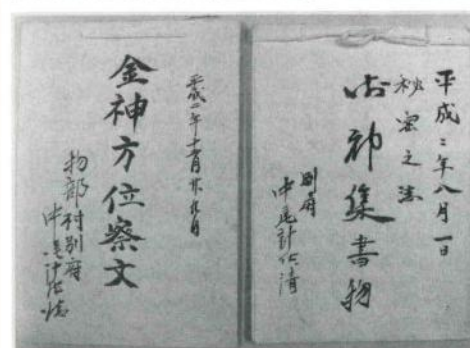
それを「法文」という。

中尾計佐清太夫が所有する法文集には、次のようなものが挙げられていた。「山の神のけみ出し敷」「山の神さあら敷」「千里投火の法」「あたこの火玉敷」「みちんの法」「ちいすい長のうら敷」

「人の玉水（魂）ぬく方」「天



↑「御神集書物」より、「高き山をわ。ひろくに。天地をくつがえし。人間に。血花を切りかけ。ただ一日に七人づつ取りころし……」といった文が見える。



↑中尾太夫から斎藤氏に託された祭文および法文の伝書。右は法文集というべき「秘密の法 御神集書物」、左は「金神方位祭（祭）文」。

神吹きみだしのうら敷」「天神血花くづし」「五人

五郎の王子のうら敷」「御崎敷」……。タイトルが意味するところは不明ながら、そこはかとなく恐ろしげな雰囲気は伝わってくる。なお、ここで散見される「敷」は「式」のこと。式神（式王子）を召喚し、使役する唱文を意味する。そして「うら敷」とはすなわち、「裏式」のことであるという。

あるとき斎藤氏は、中尾太夫から切紙（秘伝のメモ）を渡された。そこにはこんな謎めいた文言が書かれていた。「字文の。次第にわ。表の中に裏あり。裏の中に表ありません」

この「裏」が意味するものとは何か。

「裏と表というのは大事なキーワードで、表とは神を祀る祭文。祭文のなかには祀っている神様を『式』にするような法文が内包されている。それが『表の中に裏がある』の意味です。だけど、一度『裏』の法文のほうに行ってしまうと、もうこれは神祇の世界とはちがったものになる。ブラックのほう

に行ったら、もうホワイトには戻れないよ」と

「式王子とは、かつて必要に応じて招く単独の存在と思われていましたが、中尾太夫の話では、むしろ山の神や荒神、天神といった（表の）祭神を式王子にすることが重要で、いかに強大な神を自分の式王子にできるか、つまり裏に使えるかが太夫の力量を左右しているんですね（斎藤氏）

ついに、「裏」の奥の手を伝授される

中尾太夫にとって、最強の式王子は「天神法」であるという。ここでいう天神とは、天満宮に祀られる天神さんのことではなく、山の民が祀る鍛冶神のことだが、その由来や性格は斎藤氏の著書を参照いただくとして、天神の法文にはこんな文言が見える。「……時をちがえず、日をちがへず、こくげん（刻限）をちがへず……やいは（刃）の剣を以て、くろきもかきわり、五臓をき（切）りやぶ（破）り、ち（血）をあやし、ち（血）花をさかせる、正めつ（消滅）させる、かけ（影）もないぞ、そくめつ（即滅）そばかと切つてはなす」（天神吹きみだしのうら敷）※

さながら呪殺を思わせる文言だが、太夫によれば、こういった法文は災厄をもたらす悪霊の調伏に有効であり、「五臓を破る」「血花を咲かせる」といった文言を外せば、病人祈禱にも使えるのだという。とはいえ、特定の人物に向けた呪いの法として用いるのは御

法度であり、用いるべきではないと太夫は強調している。

中尾太夫の「奥の手」が天神法にあることは斎藤氏も言うす知っていた。そして、いざなぎ流の調査が終盤を迎えていたあるとき、「太夫は（斎藤氏に）自身の奥の手となる天神法の法文の名前、さらにその法文を使うときの道具や所作、幣の切り方などを具体的に教えてくれ



↑神楽にて祭文を誦む太夫たち。今日多く伝わる神楽が芸術的な色彩を強めるなか、素朴で単調な所作は「神楽」の古い形態を伝えている（撮影＝横田公人）。



↑中尾計佐清太夫の遺品である数珠。太夫が日ごろ「くじ（数珠占い）」で用いていたもので、斎藤氏に形見分けされた。



↑中尾太夫（左）と斎藤氏（右）。聞き役に徹した斎藤氏と太夫は相性が合ったと見え、太夫を通じて氏はその術の関係を先生と生徒との関係だったというが、この瞬間、ふたりの関係は師匠と弟子の関係にチェンジしたといえるかもしれない。事実、正式な弟子入りを意味する「許し」を授かることが決まっていたというが、直後、中尾氏は病で倒れ、師は帰らぬ人となった。

「不思議だったのは、あの話を聞いたとき、ふいに家鳴りがガタガタツとしたんですよ」

た（*）のだという。「ふだんは僕も話を聞きながらメモを取ったり、テープを回したりしているのですが、そのときだけは『やめろ、録るな』と。『これからしゃべったことは、自分の家族とかにも絶対いえない。もしいったならば、お前の力は無くなる』というんですよ」

すでに斎藤氏は「知りすぎてしまっ

その代わり、斎藤氏にはある命題が課されることになった。

それは、「呪術の力の側から、（世界）なるものを把握し、記述していく方法と文体」（*）を模索すること。知るとは何か、学問の意味とは何か——斎藤氏は今もその答えを捜しつづけている。